モンゴルと金と南宋との狭間からこぼれ落ちてきた梁山泊

文・イラスト／のじりまさひろ

水滸伝中盤には祝家荘や曽頭市など、自主的に軍事要塞化している村が出てくるが、このような状況というのはカナリ特殊だ。というのは、そのことは地方の政府機能が失われていることを示すからである。宋から明にかけてそういう時期は三つ。北宋末、金末、元末である。どれもが水滸伝の原料に素材を提供していると思われるが、なかでも混乱が長かったのが金末である。

十三世紀、それはモンゴルが世界に覇を唱える時代であった。それまで中国本部では、北宋を滅ぼした金が北半を占め、南宋が南半を占めてたがいに小競り合いを繰り返していた。西暦一二一〇年代、モンゴルは金へ大々的に侵入、耐えきれなくなった金は開封に遷都、それと同時に実行支配地域も河南一帯に縮小。しかし、モンゴルは当初統治するつもりもなかったので、河北・山東に広大な無政府地域がひろがった。この混乱に対応するため、各地の人々はいろんな仕方で自衛を始めた。

たとえば、のちにモンゴルの重臣となった張柔は、一族郎党で砦を作り、さらに人を集めて立てこもった。同様に子が出世した史秉直は、清楽社という互助組織を率いてモンゴルに降った。モンゴルと金の間をゆれうごいた武仙は郷兵を集めて立てこもっていた。『元史』『金史』をめくれば、この時期、郷里防衛のために軍事組織を作ったという記述がたくさん出てくる。河北の人たちがよく逃げ場に使ったのが太行山系であった。

彼らに対して、金・モンゴルはもちろん南宋までもが手を伸ばして自らの勢力下におこうとした。モンゴルは彼らに官職を与え、経験のある彼らに統治を任せたので、モンゴルのもとで成り上がった人たちを「漢人世侯」と名付けた学者もいる。

東平府の厳実はもと無頼漢だが、この時期に兵隊となって成り上がり、金→南宋→モンゴルと鞍替えしながら、東平府を中心としたかなりの範囲を押さえる一大勢力になった。彼は文人愛護で有名である。その文化の花咲く東平府での戯劇でよくとりあげられる題材の一つが梁山泊であった。東平府の南に広がる広大な沼沢地の中の山に盗賊がいる……というフィクションである。現在残っている元代の水滸戯の多くはここ東平府で作られた。

また、山東には盗賊の作った国があった。李全親子の国である。まとめて「紅襖賊」とよばれる盗賊群に投じ、集団を大きくしていった李全は、山東という地の利を生かし、南宋・金・モンゴルの間の駆け引きをへ、モンゴルのもとで他の「漢人世侯」とは違った独立王国を作りあげた。軍事集団が行政機能を備えれば、それで国家としてなりたつのである。かれの『宋史』の伝には「李鉄槍」「賽張飛」といった渾名がでてくる。

一二三四年にモンゴルが金を滅ぼした頃には無政府状態は改善され、一二六二年に盗賊王国が叛乱を企てつぶされたのを機に地方官制が整備された。

さて、この混乱の同時期を南宋で安楽に暮らした人が元初に残した書物に、宋江三十六人の現存最古の名簿が残されている。この時期はのちに水滸伝にまとめられる物語群のもとが生み出されていたのである。